

僕らの春

98センチバツ関大一

◇上

69年ぶり、2回目のセンバツ出場を決めた吹田市の関西大学第一高校。3月25日の開幕に向け、選手はプレッシャーもなく、はつらつと練習に取り組んでいる。「実質は初出場と同じ」と言うが、その表情には落ち着きさえ見える。1913（大正2）年の創部から、69年間の甲子園空白の試練を乗り越えて2度目の「春の知らせ」をつかむまでの軌跡をたどった。

【大橋 公一】

1929（昭和4）年3月31日の大阪毎日新聞夕刊。「初陣の関甲 見事鹿商を破るの見出しが踊る。第6回センバツ（全国選抜中等学校野球大会）の第1日の記事。甲子園に初出場した関大一の前身、関西甲種商業学校は鹿児島商を4―1で降した。記事は「大阪を背負って立つ関甲の勢いは（同じ大阪勢の）八尾に劣らずものすごい」とたたえている。開会式記事の見出しは「飛行機乱れ飛ぶ中に狂戦なる選手入場式。戦争の足音が近づく時代の開会式の模様を伝える紙面に、現在の相良雅文部長は「歴史と伝統の重みを感じます」と語る。

関西甲種商業学校が大阪市の上福島に創立されたのは1913年。同年、同好会として野球部が生まれ、17年夏の全国中等学校

1950年代後半、好機逃し…

冬の時代 強豪の陰で

優勝野球大会大阪大会に初出場し、八尾に10―8で記念すべき公式戦初勝利を飾っている。

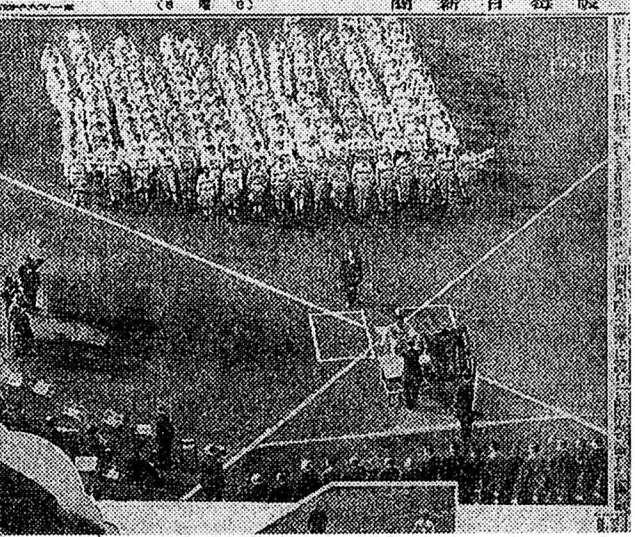
長い低迷が続いたが、戦後になって50年代後半に再び脚光を浴びる。57年、春の府大会で優勝。夏の主役

落ちた。3球続けたカーブだった。逆転負けに、長沢さんは「1球の怖さを知った」という。

長沢さんは、のちに大阪桐蔭の監督に就任。あの

12人。鹿児島商には見事な勝利を収めたが、次の試合の広陵（広島）戦に0―3で敗れたのを最後に、甲子園から遠ざかる。

涙をのんだ。続く58年秋、今度はセンバツ出場への夢がふくらむ。秋の府大会で、関西N O1投手の評価があった村瀬広基投手（元巨人）が繰り出す豪速球の前に相手校は沈黙。準々決勝に進んだが、富田林に1―2で惜敗し、夢はついえた。



関大一が初出場した第6回センバツの開会式を伝える大阪毎日新聞

試合を教訓に91年夏、甲子園初出場で初優勝を果たした。尾崎監督は当時を思い出しながら「教え子に先を越された」と苦笑いした。以来、高校野球全体のレベルがアップ。特に大阪は私学8強と言われた時代が続き、PL学園、上宮といった強豪が全国制覇するなど華々しい活躍を見せた。その間、関大一は強豪の壁に跳ね返される年が続く。